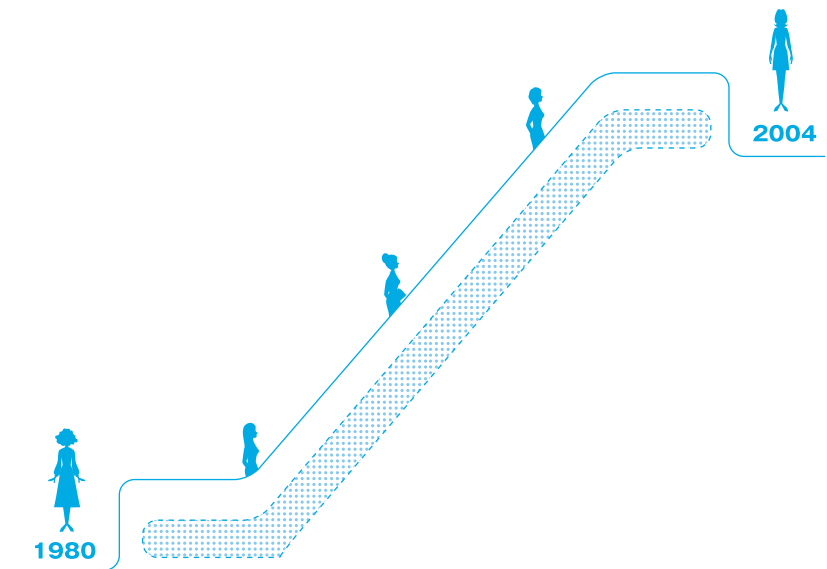


働く 女性白書 2004

「新OL白書1980」からの変化
ダイジェスト版



ベルメゾン生活スタイル研究所
2004年5月10日 発行



はじめに

ベルメゾン生活スタイル研究所では、その発足にあたり、2004年3月に全国の働く女性の職業観、結婚観などについてのアンケートを実施しました。今回の調査は、1979年に(株)千趣会が東京と大阪の企業で働く女性たち、のべ600名について調査を行い、『新OL白書1980』としてまとめたものとほぼ同一の調査を行ったものです。現代の働く女性の意識調査であると同時に、この25年で働く女性——特に企業で働く女性の意識がどう変化したかを示すものとなっています。

この25年、日本企業、およびそこで働く女性の環境は大きく変わりました。前回の調査を行った1979年から80年にかけては、働く女性の環境が大きく変化しはじめた時期にあたります。

1975年の国際婦人年をスタートの年として、国連は10年間で女性の社会的地位の向上を目指す取り組みを行っていました。

1979年、先進国で初の女性首相が登場します。英国のサッチャー首相です。彼女は80年の5月に東京サミットで来日、女性の時代の到来を強く印象づけました。同じ79年、NECからパソコンPCシリーズの1号機が発売されています。コンピュータやワープロの発達、そして通信革命は、職場や生活環境を大きく変化させました。

SE(システム・エンジニア)の世界での人材不足は、1970年代まで企業への就職が難しいとされた4年制大学卒業女性の職場進出の大きな足場となりました。また、高校や短大出身女性が中心だった事務職の仕事内容も大きく変えていきます。

1986年、男女雇用機会均等法が施行され、4年制大学卒業女性が総合職として企業に入り始めます。

その直後のバブル景気、そして失われた10年と呼ばれる景気低迷を迎えますが、女性の4年制大学進学率は上昇を続け、確実に企業社会の中に進出して行きます。一方、派遣社員というスタイルが定着する中、高卒や短大卒女性の新卒正社員雇用は減少しています。25年の間に、オフィスで働く女性はその仕事内容や雇用形態などが大きく変わったというわけです。

お読みいただく前に

《1980年の調査概要》

調査地区 東京・大阪
調査対象 上記地区に勤務する大企業のOL
(但:千趣会会員登録者)
サンプル数 各地区620サンプル
計1240
調査方法 留意法
調査期間 昭和54年9月
調査実施 株式会社千趣会

《2004年の調査概要》

調査地区 東京・大阪
調査対象 上記地区に勤務する企業・組織のOL
(但:千趣会会員登録者)
サンプル数 2152サンプルに発信し
3月末日での有効回答610サンプル
調査方法 郵送調査
調査期間 平成16年3月
調査実施 株式会社千趣会

1980年の調査が「新OL白書」であったのは、その調査対象が東京・大阪の大企業の事務職正社員に限定されていたためです。そうした職種の女性を指す言葉として『OL』が似つかわしい言葉だったからです。

今回の調査対象者は、やはり正社員として働く女性を東京・大阪で抽出したのですが、企業や官公庁など組織で働く女性の職種、年齢、学歴は前回調査と大きく異なり、幅広いものとなりました。

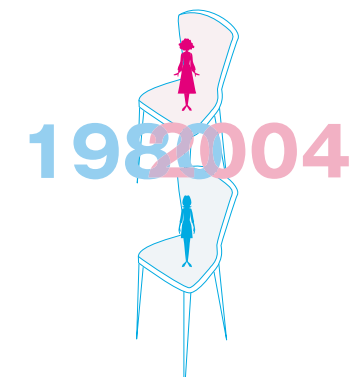
そこで今回は白書のタイトルを『働く女性白書』としてみました。

調査対象の性質そのものが変化したため、1980年との単純比較に意味を見出すのは多少の無理があるかもしれません。しかし、その結婚観や職場観など、明らかに大きな意識の変化が見られたデータは貴重なものとして、比較検証を試みました。この25年、オフィスで働く女性そのものも変化しているのです。

なお、このリーフレットはベルメゾン生活スタイル研究所開設に当たって作成した抜粋資料集です。

より細かな分析を加えた『働く女性白書2004』は、今夏、研究所編集のもとで発刊する予定です。みなさまからのご指摘、助言を本体編集に際しぜひご参考にさせていただきたいと思えます。本リーフレットを読まれてのご感想をいただければ幸いです。

ベルメゾン生活スタイル研究所



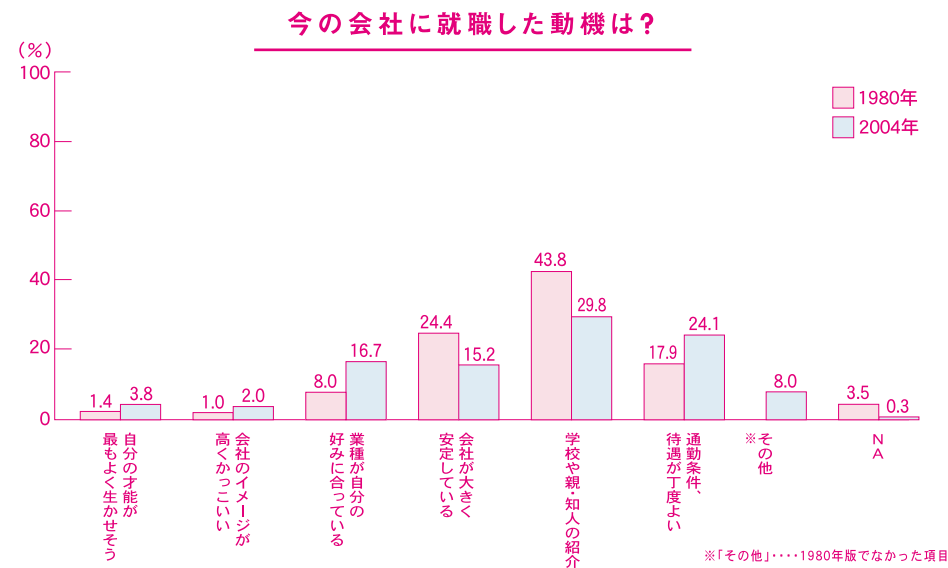
自分で選んだ仕事と職場、 だからプライドを持って頑張りたい

—— 今の働く女性の仕事観

今の働く女性と、25年前に企業で働いていた女性とでは、職場や仕事に対する意識はどう変化したのでしょうか。まず職場に接する第1段階である入社動機と、そこで自分が必要とされていると感じているか、という意識を比較してみました。

変化した入社動機

働く女性の第1歩である入社動機が、この25年の間に大きく変化しています。「業種」「職種(自分の才能が生かせそう)」といった動機が倍以上ポイントを増やし、「学校、親の薦め」「大きい会社」が大きく減少。自分で選んだ今の職場、という女性が増えています。



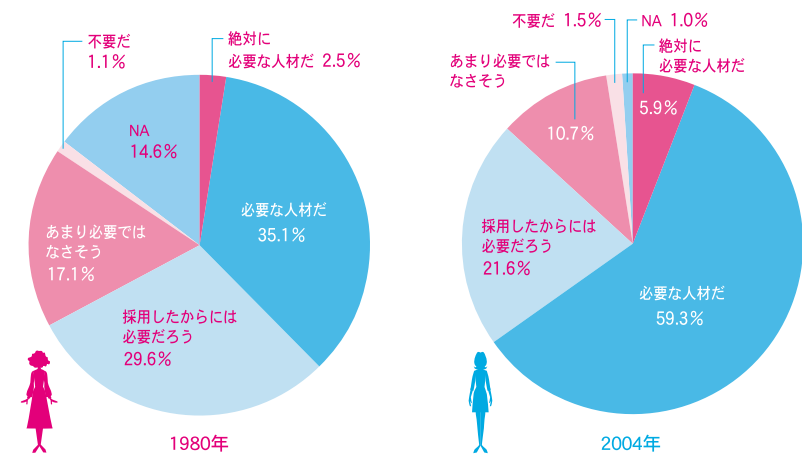
まず自分の好きなこと、できることを考える

以前の女子学生の就職では「学校推薦」の占める割合が大きいものでした。それが一般公募が多くなったことから「自分のやりたいことは何か」と向き合う意識が高まったのかも知れません。ただそれだけに、「本当に働きたい職場とは違う」女性も生まれているようです。「ここしか採用されなかったから」といった意見が複数見られました。ただ、周囲の評価や薦めで職場を選ぶ時代から、自分の価値観で職場を選ぶ時代に変化しているようです。

自分は職場にとって必要だ、という意識

「会社(職場)にとって必要な人材である」という意識が、現在の働く女性の約60%に達しています。25年前が35%だったことを考えると、自らの職場での存在に対する自信の深まりがうかがえます。「自分の選んだ仕事」という意識の高さが、ここに現れているようです。

今の自分が会社にとって必要な人材だと思う？



個々の役割が明確になり始めている？

現在の日本企業の多くが、人件費抑制のため人員削減を打ち出しています。その時代の中で組織で働く女性の仕事の質も変化しています。1980年の「必要な人材意識」の低さには、当時のOLという言葉が、組織から見れば「職場の華」というニュアンスが、働く本人から見れば「腰掛け」というニュアンスがあったことの裏返し、そして今はそれが薄れつつあると見ることができそうです。

働く意識が高くなった、 だからこそ気になる男女の格差

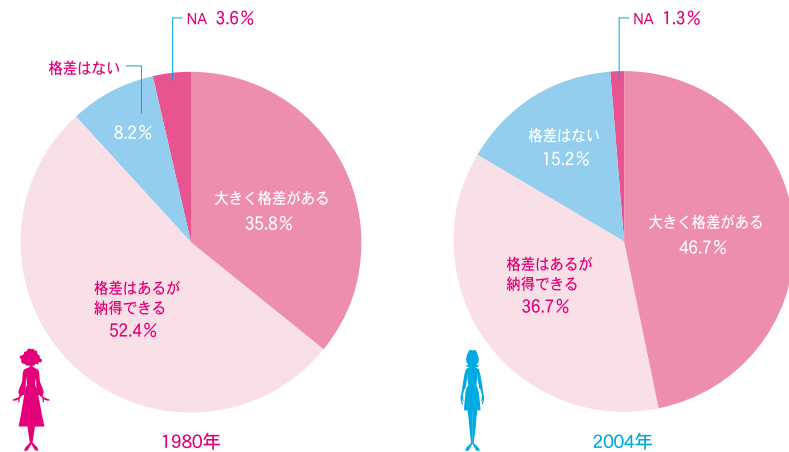
——働く女性の職場での男女雇用機会均等法

自分で仕事を選ぶ、だから会社に必要な人材として働いている、という今の女性たち。
それでは、企業はその女性の姿勢、意識に十分応えているのでしょうか。
男女雇用機会均等法施行から18年目の、職場の性差感を聞きました。

2極化しつつある男女格差感

1980年ではトップの「格差はあるが納得できる範囲」が大きく減少し、「大きく格差がある」と「格差はない」の2極化の方向が見られます。
関連設問として「どこに格差を感じるか」を聞いていますが(今回は割愛)仕事の内容や昇格での格差を挙げる声が高まっています。

あなたの会社では女性と男性で制度や待遇で差がありますか



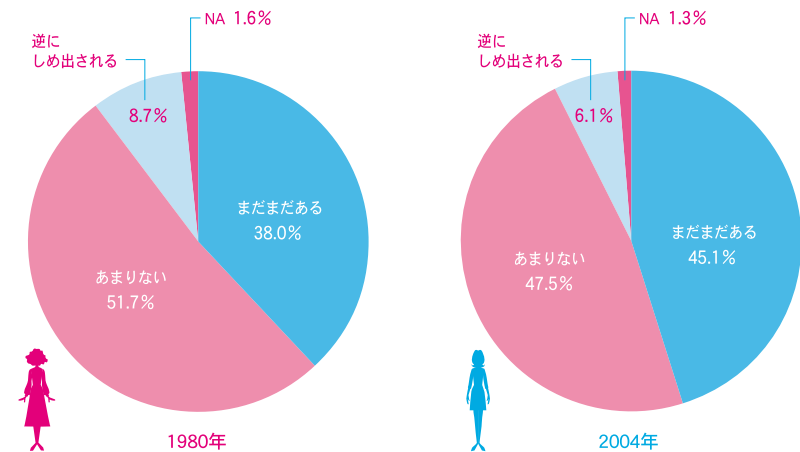
働く女性のプライドと企業意識の温度差

1986年の男女雇用機会均等法の施行以降、多くの企業が女性の雇用条件を見直しました。企業は改善を進めています。しかし結果は2極化という数字を示しました。これは「自分はそれほど必要な人材ではない」から「多少男性社員と比べて不利でもしょうがない」という「格差納得派」が減少し、働く内容そのものに対する考慮を期待している女性が増加している事と、企業の温度差を示した結果かもしれません。

働く女性の可能性は広がり続けている

男女雇用機会均等法施行によって男女格差が解消されたと仮定した場合、「まだまだある」は減少が予想されましたが、結果は「まだまだある」が上昇というものでした。まだ女性の能力を生かしきれていない、という感想を現場の女性たちは感じているようです。

あなたの会社にもっと女性の進出する余地はありますか?



仕事のあり方の変化が生んだ、今の企業への不満

1980年のデータは、主に企業の一般事務職の女性に対する調査結果です。これに対して今回のデータは企業・組織で働く女性についての調査結果。つまり、「企業における女性の職は事務職である」という常識があった時代と、それが薄まった時代の調査であるということです。「女性が進出する余地」が何を指すのか、より細かな検証が今後必要ですが、この変化が、企業に対してより高次での女性の活用を、という要求を生んでいると見られます。

職場は働く場所であり、友人関係や上下の人間関係を学ぶ場所ではない

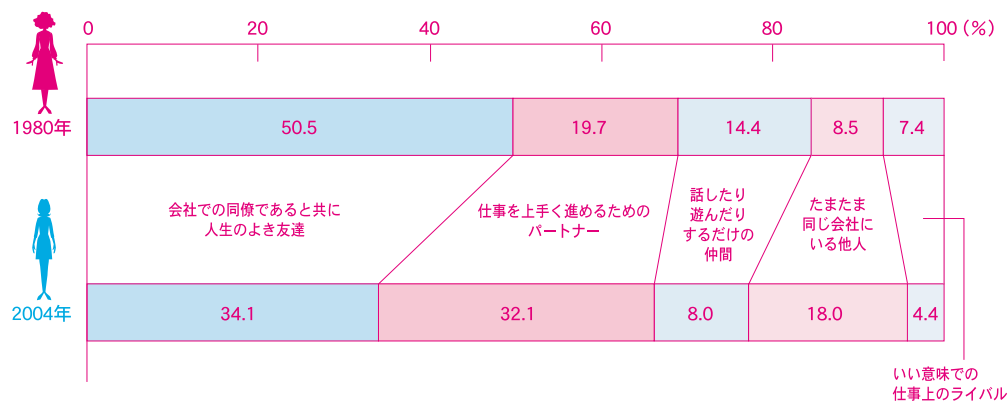
——働く女性の職場での人間関係

自分の仕事に誇りを持ち、もっと活用してほしいと願う働く女性。では彼女たちは、職場に仕事以外の何かを求めているのでしょうか。人間関係をどう見ているのでしょうか。家族的と言われることが多い日本企業の変質を、彼女たちは示してくれるかもしれません。

女性の同僚は仕事の仲間、友人とは違う

「同僚であるとともに友人」「遊び仲間」という回答が大きく減少し、「仕事の仲間」「同じ職場にいるだけの他人」という回答が増えました。職場を意識する時にまず仕事が入り、その仕事が入り進むかどうかが良い同僚、という意識が高まったと言えます。

同僚とはあなたにとって何ですか



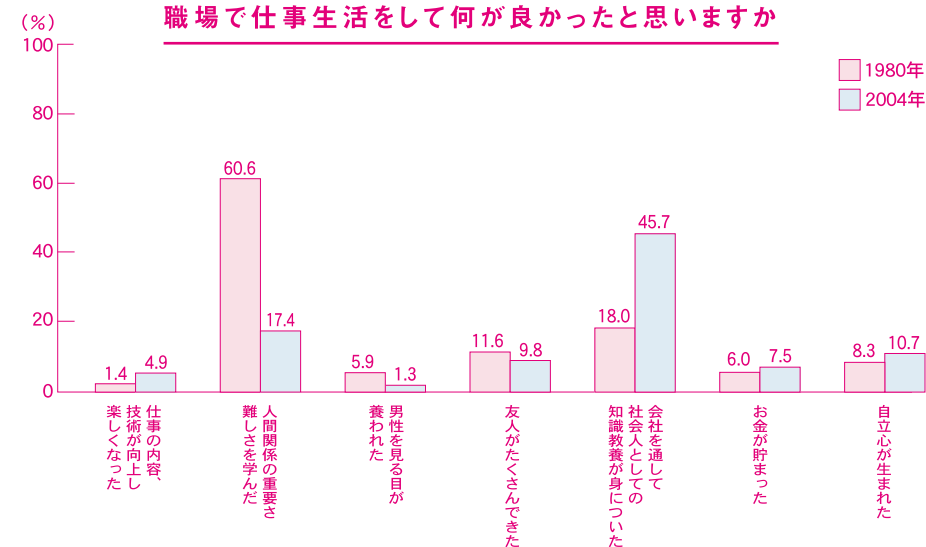
薄れていく等質性

企業の社員募集形態が変わり、事務職の大量採用が減ったことがこの回答に現れていると感じられます。同じような学校を出て、同じように推薦で会社に入った1980年代のOLにとって、企業はそのまま学校の延長であり、友人との出会いの場でもあった。それに対し、今の企業が仕事の各パーツを担う者の集合体であるとすれば、同僚に求めるのは仕事の遂行能力の高さとなります。職場での人間関係が変化するのも当然の結果なのでしょう。

職場で磨かれる社会人としての素養

(今の)職場で働いて何が良かったか、回答では、1980年では60%に達した「人間関係を学んだ」が大幅に減少、「知識教養が養われた」が倍以上増え40%を越えました。ここでも職場は仕事の場であり、それ以外の人間関係への意識は希薄という傾向が見られます。

職場で仕事生活をして何が良かったと思いますか



今の人間関係にこだわりを持たない?

同質感が強かったかつての職場では、自然と将来への安心感が生まれたのかも知れません。人間関係を大事にしていれば、少なくともみんなと同じような未来がある、というような。だから人間関係を「学んだ」(学ぶというのは将来への準備の意味として)。それが今の働く女性は、将来の準備、安心感を、職業技術を高める、教養を深めることで得ている、将来、頼れるのは自分の能力、という意識で働いていると見るのは読みすぎでしょうか。

変化した女性の意識とともに、 広がる選択肢。

対談

大石 友子 (京都学園大 経営学部教授)

坂本 典子 (ベルメゾン生活スタイル研究所 研究員)

25年の間に企業で働く女性は、その仕事内容、スタイルが大きく変化しているようです。では、彼女たちの意識はどう変わったのでしょうか。また、これからの働く女性のあり方はどうなるのでしょうか。今回の調査データをもとに、当研究所の主任研究員でもある大石友子・京都学園大学教授(女性起業家論)に話をうかがってみました。

坂本: 今回の働く女性調査、25年前はOL調査として行ったものですが、残念ながら基本属性に
ずいぶん大きな隔たりが出てしまいました。25年前は平均勤続年数4.3年、平均年齢23.2
歳だったものが、今回は9.4年、29.7歳となってしまいました。

大石: とても興味深い調査だと思います。確かに属性の部分は違いますが、その変化自体が25年
の間に企業で働く女性のスタイルが変化したことを示すと考えられます。一般事務職が
若い女性の仕事の典型であった時代から、総合職や専門職に女性が進出し、企業で働く女
性のあり方が変化しました。もう昔のイメージのOLという言葉でくくれなくなっていますね。

坂本: その『昔のOL』と違うと痛感させられたのが、「同時に入社したOLがみんなやめてしまっ
てあなた一人になったらどうしますか?」という質問でした。以前は7割以上のOLが辞め
ると答えていたのが、現在は9割以上が辞めない。「そんなこと気にもしない」「人は人、自
分は自分」という意見が圧倒的で、この質問の意味がわからないという声も届きました。

大石: 以前は一流企業に働く夫と、それを支える専業主婦という1つのパターンが幸せな生活
のモデルなんだ、という感じがありましたからね。企業は娘さんを花嫁候補生として家庭
から『お預かり』し、女性たちはできるだけ若い間に結婚相手を見つけ、寿退社するという
時代でした。例えば1980年前後、25歳~29歳の女性の既婚率は約78%です。ですから企業
は高校卒、短大卒を集中的に採用していました。

坂本: そして4、5年で辞めるのが前提となると、あまり厳しい仕事は要求されない。
また長く働くと、「まだいるの?」などと言われたり。

大石: 仕事に対して高い意欲を持った人でも、そういった環境で勤労意欲を無くした人も多か
ったかも知れません。また親たちからも女性の幸せは結婚だと言われることが多かったで
しょう。私は、高度経済成長の時代には、効率の良い大量生産大量消費が求められ、労働力
の供給と消費の場所としての均質の家庭観を生んだと考えています。女性たちは20代半
ばで結婚退社、専業主婦として育児に専念し、夫は終身雇用を前提とした企業戦士になり
仕事に専念、という家庭ですね。



大石友子教授

坂本: その価値観がこの25年の間で変化したわけですね。

大石: 高度経済成長時代は過ぎ去り、消費者の個性やニーズに応じた多
品種少量生産の時代になり、多様性、多面性こそが重要視されるよ
うになってきました。ある調査によると、終身雇用を維持したいと
考えているのは上場企業の2割弱です。また、社員の個々の能力を
いかに引き出すかが経営戦略の重要な課題となってきています。
こういう時代になってくると生活スタイルも1つの幸福のパター
ンではおさまらなくなって当然でしょう。

坂本: 女性から見ると、結婚は永久就職ではなく、仕事との両立が当然のものになったわけ
ですね。では彼女達にとって仕事とは何なのでしょう。充分なお金があっても仕事を続ける
という女性が25年前に比べてずいぶん増えているんですが。

大石: 1つには、ある程度責任のある仕事をしていて、満足感や達成感を得られるよ
うになったのではないのでしょうか。あと、働く目的が、単なる報酬や短期的な目的でなく自己実現、自
己の能力の確認ということになっていると思います。マズローの欲求5段階説に従うと、
自己実現のために行動するというのもっとも高次元な人間の欲求ですが、働く女性た
ちの意識も非常に高くなっていると思います。

坂本: その自己実現の夢を感じているからでしょうか、生まれ変われるとし
たらやはり女性がいいという意見も増えているんです。

大石: 私が若い頃は、働きたいと思っても女性の活躍の場が少なく、男に生
まれたかったと思ったこともありましたが、今はその逆かもしれない
ですね。女性はどんどん今までの制約を壊し、枠をはずしていくの
に対し、男性のほうが昔ながらの「男の責任」みたいな概念にとらわれて
いるような気がします。また、女性は子供を産む、産まないなどを含め
て、さまざまな選択肢が広がっていますから。

坂本: その働く女性の悩みになっているのが出産、子育てのようですが。

大石: 徐々に整備されつつあるとは言え、まだまだ保育施設は十分だとはいえません。
一部では、三歳児神話に代表される母親の責任が強調され、子供は母親と一緒にいないと、
という意識も強く残っていますからね。ただ、この調査でもわかるように、わずか25年でこ
れだけ人々の意識が変わり、企業も変化したんです。今、働く女性たちがパートナーととも
に仕事と育児の両立を頑張っていけば、きっと意識はもっと大きく変わっていくと思いま
す。そして環境も変わっていくでしょう。



坂本典子研究員

大石 友子(おおいし ともこ)

京都学園大学経営学部教授

早稲田大学第一文学部卒業、慶應義塾大学大学院経営管理科履修。

(財)横浜市女性協会、(財)女性労働協会等において再就職支援、
企業支援等の就業支援事業、調査研究に携わった後、2001年より
現職。著書に「女性の働き方ガイドブック」(経済産業調査会)ほか。

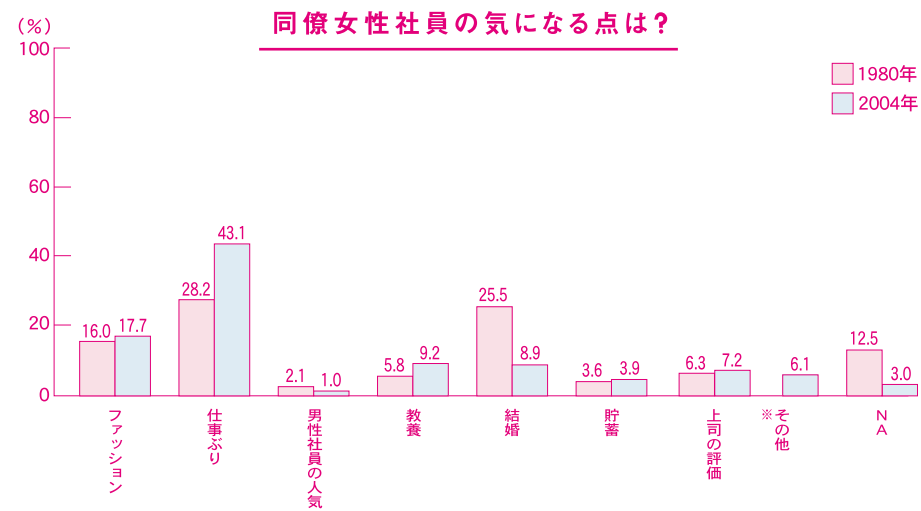
結婚しても仕事を続けるのは、 当たり前のこと

働く女性の仕事と結婚観

働く未婚女性にとって結婚は大きな問題です。仕事と私生活の充実をどう両立させるか。あるいは職場で同僚が次々と結婚、そして退社という状態になった時に、どういう態度で向き合うか。この部分で、25年の間に大きな変化があったようです。

他の人の私生活は気にならない、もちろん結婚も

1980年の調査では、同僚の女性で気になるのは仕事ぶりや結婚でした。それが現在では仕事ぶりが他を引き離しています。教養と上司の評価も微増。ファッションはいつの時代も気になるようですが、ここでも同僚はまず仕事のパートナーという意識が見えます。



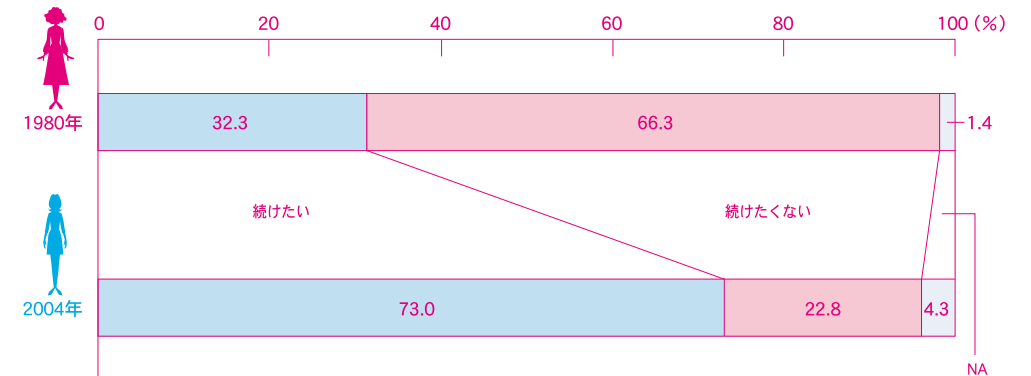
なぜ結婚という項目があるの？

25年前の調査の再現を試みたことで、今の女性から見ると「ずれた」質問がいくつか生じたようです。これもその1つ。同僚の結婚に関心がある、ということ自体が不思議に思った人が多かったようです。「何も気にならない。仕事さえきちんとしてくれれば」といった自由回答がいくつも見られました。職場からプライベートな部分での影響やプレッシャーは受けない、という意志すら感じさせる結果になりました。

きれいに逆転した、仕事と結婚の両立

結婚しても仕事を続けたい、が70%を超え、4人中3人までが仕事と結婚の両立を選びました。25年前は32%、3人に1人しか続けると答えていなかったのに比べると、きれいに逆転しています。結婚退社というかつての常識が非常識になりつつあります。

結婚しても仕事は続けますか？



本当の問題は出産？

現在では結婚は仕事を辞める理由とはなくなっています。ただ別の設問では、結婚は問題ではないが出産では考えるという数字が出ています。これも25年前と比べると大幅に減少はしているのですが、まだまだ出産・育児という部分と仕事の両立は難しいと考えている女性が多いようです。ただ仕事を続けたいという意欲は強いので、育児環境が整えばこれも仕事を辞める理由とはならない時代になりそうです。

まだまだ伸びる、自分の能力、そして可能性。だから仕事を続ける

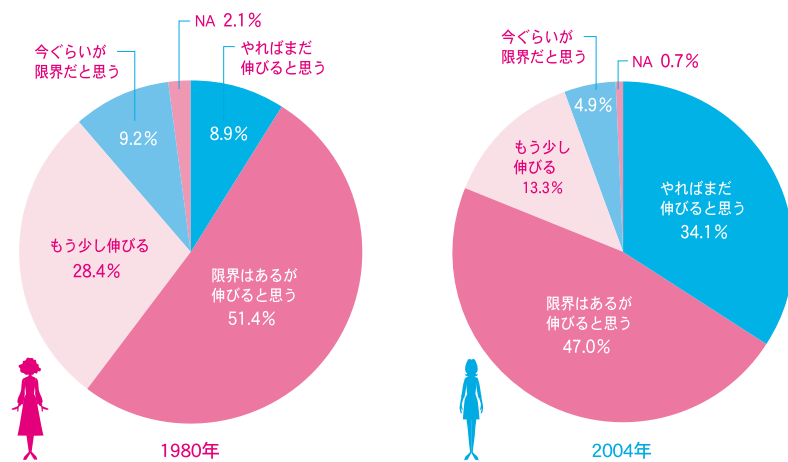
——働く女性の「これから」の自分と仕事観

今、働いている女性は、これからもずっと働きつづけたいと思っているのでしょうか。そして、どういふ自分になりたいと考えているのでしょうか。簡単な設問から、これからの働く女性の方向を見ておきたいと思います。

まだ自分の限界ではない、が9割以上

仕事の能力について「やればまだ伸びる」が25年前の約4倍となっています。限界と答えた人は半減しました。トータルでは伸びる余地があると答えた人は25年前も9割近かったのですが、現在の方がまだまだ伸びる、という意識が明らかに高くなっています。

あなたは仕事の能力の上で限界があると思いますか？



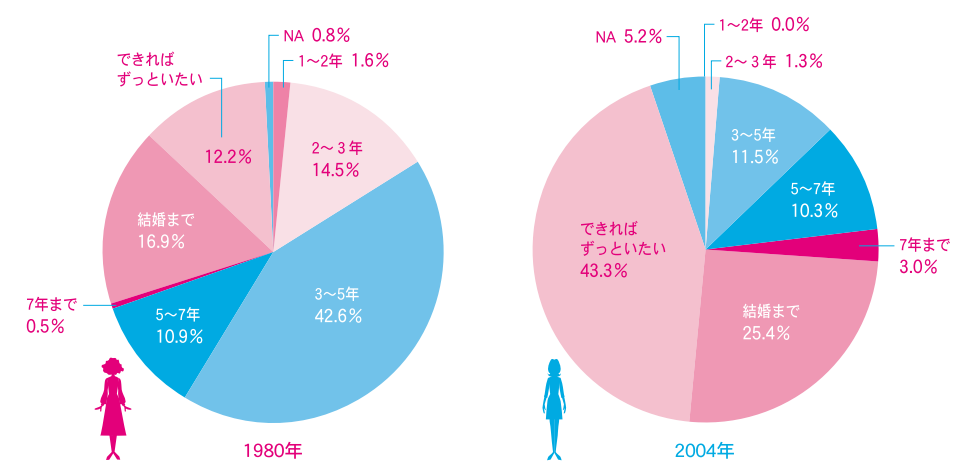
いつも何かを学んでいた

25年前も、実は働く女性の向上心は非常に高いものでした。たとえルーティンワークに見える事務の仕事でも、いかに効率を高めるか学んでいたのです。現在、さまざまな職種に女性が進出し、長く働くことが当然と考えるようになり、その向上心はますます高まっているようです。仕事人として、自分の能力は伸びると信じて毎日働いている。これも職業意識の高まりを示す1つの結果と見ることができます。

仕事はずっと続けるもの

25年前、結婚退社という言葉が生きていた時代は、OL生活は3~5年と考えていた人が4割を超えています。それが現在では、「できればずっと続けたい」が主流となりました。女性にとって働くことは、期限つきのものではなくなってきたのです。

OL生活は何年ぐらいが適当ですか



OLという言葉の意味が変化した25年間

この質問も現在の働く女性にはピンとこなかったようです。25年前、「何年OLするの?」という質問が当然のものであったのに対し、現在の働く女性は、数年で辞めるのが常識という意識が希薄になっています。契約社員や派遣社員といった新しい雇用形態がかったのOLに代わったのかも知れませんが、少なくとも働く女性は「仕事は結婚まで」と思っていません。OLという言葉は残っていても、その中身は大きく変化したのです。

設問内容一覧

- 1 現在、あなたは働いていますか？
- 2 あなたの勤務スタイルは？
- 3 その勤務スタイルを選ぶ一番の理由は何ですか？
- 4 今の会社に就職した動機は何ですか？
- 5 あなたは一生懸命仕事をしていると思いますか？
- 6 OLにとって一番大切なものは、次の中ならどれですか？
- 7 OLにとって一番欠けているのは、次のどれですか？
- 8 あなたのまわりのOLで多いと思うタイプはどれになりますか？
- 9 現在あなたはどのタイプのOLだと思いますか？
- 10 次の中であなたが共感できるOLはどのタイプですか？
- 11 最近女性が重要な役職について話題になっていますが、どう思いますか？
- 12 あなたの今の仕事上の立場を言葉に表わすとなんと呼べますか？
- 13 キャリアウーマンという言葉はどう思いますか？
- 14 キャリアウーマンという言葉に次のどれを連想しますか？
- 15 あなたは自分の仕事ぶりに対し十分に給料を貰っていると思いますか？
- 16 現在の仕事の内容にやりがいを感じていますか？
- 17 お茶くみやコピーなどの仕事にも働きがいがあると思いますか？
- 18 あなたの今の会社での仕事は生きがいと呼べますか？
- 19 あなたは会社の中で男性と対等に仕事をしていますか？
- 20 今の自分が会社にとって必要な人材だと思いますか？
SQ では生かされ方によっては必要な人材になれると思いますか？
- 21 あなたは魅力ある仕事なら転職しても良いですか？
- 22 上司に希望することは次のどれですか？
- 23 あなたの出世に対する気持ちは次のどれですか？
- 24 あなたは仕事の能力の上で限界があると思いますか？
- 25 今、会社では女性と男性において制度や待遇で格差はあると思いますか？
SQ どの点ですか？
- 26 仕事に関して女性だという事で損だったと思うことはありますか？
SQ それはなぜですか？
- 27 仕事に関して女性だという事で得だったと思うことはありますか？
SQ それはなぜですか？
- 28 あなたの会社にはもっと女性の進出する余地があると思いますか？
- 29 仕事であなたの能力は十分生かされていると思いますか？
- 30 あなたは現在の仕事の内容は自分に適していると思いますか？
- 31 会社の男性社員の中で多いタイプから番号を打って下さい
- 32 同僚OLの一番気になる面は？
- 33 会社のお昼休みにはどんな話をする人が多いですか？
- 34 同僚OLとはあなたにとってなんですか？
- 35 どんな本をよく読みますか？
- 36 職場で、いま一番関心のあることは何ですか？
- 37 男性社員の最も魅力のある年代は？
- 38 妻子ある男性に恋をした事がありますか？
- 39 あなたは職場で男性を見直す機会が多いですか？見損なう機会が多いですか？
SQ 見直す機会が多かったのはどんな時ですか？
SQ 見損なう機会が多かったのはどんな時ですか？
- 40 職場は結婚相手探しの場であるという考え方にあなたはどう思いますか？
- 41 同時に入社したOLがみんな辞めてしまってあなた一人になったらどうしますか？
SQ どうしてそう思いますか？
- 42 あなたは結婚後も仕事を続けたいですか？
SQ では、子供ができたならどうしますか？
- 43 あなたが会社を辞めるといったら、会社は引き止めてくれると思いますか？
SQ なぜ、そう思いますか？
- 44 OL生活は何年ぐらいが適当ですか？
SQ それはなぜですか？
- 45 OL時代はあなたにとってどんな時期ですか？
- 46 あなたは何のために働いていますか？

働く女性をめぐる 1970年代後半から 90年代にかけての動き

- 1970 ● 国連婦人年 メキシコで世界会議、今後10年での男女平等達成のための行動計画が採択
「ワタシ作る人、ボク食べる人」のTVCMが放送中止
- 1977 ● 平均寿命が男女とも世界一に
- 1979 ● 大学共通一次試験開始 女子の4年制大学進学率が10%を超える
大卒女子の就職率は66%、短大は76%
- 1980 ● 女性向け求人情報誌「とらば一ゆ」が創刊
山口百恵が21歳で結婚のため引退
- 1981 ● 16ビットパソコン発売開始、OA化が一気に加速
- 1985 ● 男女雇用機会均等法が成立、翌年から施行
- 1986 ● 土井たか子が日本社会党の党首に
- 1989 ● ベルリンの壁崩壊、天安門事件の一方でバブル景気がピークに
- 1990 ● 女性の大学・短大進学率が37%と男性(35%)を上回る
大卒女子の就職率も81%と男子に並ぶ(短大は88%)
- 1995 ● 第4回世界女性会議 セクシャルハラスメントが問題に
- 1996 ● 女子の4年制大学進学率が短大を上回る(4年制大学25%、短大24%)

働く女性白書2004～「新OL白書1980」からの変化～
は刊行レポートとして2004年8月頃に上梓する予定です。
ご期待ください。

〈お問い合わせ先〉
ベルメゾン生活スタイル研究所 TEL:06-6881-3043 FAX:06-6352-9286

- 47 今の仕事はあなたに一番何を与えてくれますか？
- 48 会社に入って一番変わったのはこの中のどれですか？
- 49 OL生活をして何が良かったと思いますか？
- 50 あなたは会社をやめたいと思ったことがありますか？
SQ やめたいと思ったのはどんな時ですか？
- 51 もし働かなくても今と同じくらいの収入があれば、会社をやめますか？
SQ やめて何をしますか？
SQ なぜやめないのですか？
- 52 あなたは生まれ変わるとしたら男と女どちらをのぞみますか？
SQ それはなぜですか？
- 53 あなたご自身のことについてお聞きします。
① あなたは働き始めてから通算で何年になりますか？
② あなたの昨年の年収(税込)は？
③ あなたの職種は？
④ あなたが働く業界を選んでください
⑤ あなたの年齢は？
⑥ あなたの最終学歴は？
⑦ あなたのライフスタイルは？
- 54 あなたは『OL』と呼ばれることをどう思いますか？
SQ では、どう呼ばれたいですか？
- 55 最近結婚をしない女性が増えてきていますが、それについてどう思いますか？